

代議士 宮本逸三

那珂市歴史民俗資料館



1 来歴

安政6年(1859)10月21日、下利員しもとしかず(旧金砂郷村、現常陸太田市)の須藤家に誕生し、明治9年(1876)18歳の時に鴻巣村(旧芳野村、現那珂市)の宮本家の養子となり、昭和5年(1930)4月15日に73歳で死去した実業家であり政治家です。宮本家は古くから醤油の醸造を営み、明治30年(1897)に常磐線佐和駅が設置されてからは日本肥料の特約店として肥料の販売も行い、地元芳野、戸多、国田地区などに販路を拡大していきました。その一方で地域をリードする立場にあり、養父宮本逸平は明治22年(1889)に発足した芳野村の初代村長に就任しています。

逸三も早くから民権運動に関心を持ち、明治15年(1882)に地元飯田村に発足した集宣会しゅうせんかいに養父と共に加入しています。その力をもって明治18年(1885)9月25日には茨城県会議員に初当選し、明治37年(1904)に退任するまで20年間在任しました。しかもその間、明治22年(1889)には芳野村会議員に初当選し、明治26年(1893)には芳野村長も兼ねました。その在任は11年にわたり、父子一体となって地元の発展に尽くしています。この時期の国情は日清戦争、日露戦争を経験する非常事態にあり、県政も自由党、改進黨と政党色がとみに増すなど対立混迷の中にありました。そのような中で逸三は、中堅議員として県政融和に努めました。

その後、大正6年(1917)4月に立憲政友会から衆議院選挙に立候補して初当選をはたし、大正13年(1924)5月の総選挙では根本正を破って衆議院議員2期目を務めることとなりました。また、立憲政友会茨城県支部長として総理となる犬養毅とも親しく交流するなど、本県政界の重鎮として県政をリードしました。

2 那珂郡役所の新築問題

那珂郡役所は明治11年(1878)に菅谷の不動院に置かれていましたが、明治23年の新府県制・郡制法が公布されたことを機に郡役所の新築問題が起こります。那珂湊(現ひたちなか市)周辺地区からは湊へ新設しようとの大きな運動が起こりました。宮本逸三は、那珂郡の位置および将来性から判断して、現在地である菅谷に新築する運動の代表として先頭に立ち、同24年暮れに菅谷決定を見るにいたります。これにより、菅谷地区は大いに発展することとなりました。

3 鉄道敷設運動

那珂地方には、太田鉄道(水戸～太田間)が通っていました(明治34年に水戸鉄道が買収)。明治44年(1911)3月、郡選出の代議士根本正らが推進する白河～水戸間の白水鉄道の建設案に加え、勝田～大宮間の鉄道敷設も衆議院で可決されました(政友会内閣)。これは常磐線と湊鉄道の連結および海産物の内陸輸送の便を図るため、水郡線の延長案として勝田～上菅谷～大宮を結ぶ計画でした。

これに対し水戸鉄道は、大正4年(1913)12月に上菅谷～常陸大宮間の鉄道敷設を申請してきました。

宮本逸三は、国家事業としての鉄道敷設を期待し、この水戸鉄道の申請に反対。翌大正5年(1914)1月に根本正らと共に、水郡線の延長案(勝田～大宮)計画を茨城県知事岡田宇之助おかだうのすけに陳情しています。

しかし、立憲国民党の大隈重信内閣により水郡線案は建設延期となり、逆に大正5年3月水戸鉄道の申請が許可されました。早期の鉄道開通を期する宮本逸三は、この水戸鉄道敷設に協力することになります。自分の所有する土地を常陸鴻巣駅敷地として寄付提供した上、駅舎建設費の一部も寄付しました。こうして鴻巣駅舎は大正7年(1916)6月に建築され、続いて同月瓜連駅、10月には常陸大宮駅も完成して水戸鉄道の水戸～常陸大宮間が開通しました。